

はじめに

恩師である陣内秀信教授を通じて、公益財団法人アーバンハウジングのためにこの研究報告のお話をいただいたとき、私はすぐに反応した。イタリア中部のトスカーナ州に住んできた15年間という年月のなかで、いろいろと思うところや温めてきたストックが多分にあったからだ。ただそのとき、私はひとつ間違いをしたと思っている。自分の住んでいる人口9千人足らずのマッサ・マリッティマという小さな町では、日本の方々にとってアピール性が弱いだろうと、従来の思い込みから、過小評価してしまったのだ。当初は、マッサ・マリッティマと歴史的にかかわりの深い、もう少し大きい規模のシエナ(人口約5万人)との比較で論を進める予定でいた。シエナは、ユネスコの世界遺産にも登録されており、日本でも知名度が高く、魅力的な都市構造を持っているからだ。

ところが面白いことに、この研究を引き受けたとたん、マッサ・マリッティマに関する興味深い情報が、私のもとにたくさん舞い込んできた。この土地で相変わらずの日常生活を続けているのだけれども、思考が研究モードに入ったというだけで、これまで知り合うことのなかった人を紹介していただいたり、もともと知っている人がとっても興味深い話をしてくれたり、広場や街路で出会う名前も知らない人が面白いことを言ってくれたりする。ちょうど知りたい、と思っていたことをテーマにシンポジウムが開かれる。そして、この小さな町だけで、もう十分に興味深い、ということを感じずにはいられなかった。

そして、文献的にも恵まれた。この町については、10年以上前に書籍で調べようと思ったことがあるが、地元の図書館にも私の好奇心を満たしてくれるものはほとんどなかった。だが、タイムリーにも、近年に素晴らしい出版物がいくつも出ていたのである。とりわけ活発な近年の都市再生については、ぜひどこかで書きたいと思っていたので、陣内教授と当財団法人理事長の内藤勲氏には、絶好の機会をいただいたと思っている。

当初考えていたシエナとマッサ・マリッティマの比較、というのは、形態的に見ていくと面白いだろうと思う。ただ正直これは、建築的なセンスのある人ならば、言葉があまりわからなくてもある程度はできることだ。シエナなら、歴史的資料や文献も豊富で、そもそもシエナに関心を持つ人は多いので、他の人に譲ってもいいだろうと感じた。長年住んできたという特異な経験を生かして、自分にだけにしか書けないものを書くべきである。そうした経緯を経て、多くの協力者たちへの恩返しのためにも、シエナと両天秤にかけることなく、マッサ・マリッティマを主体に書くことに決めた。シエナに限らず、自分の住む場所以外のことを書くことは、どうしても「外来者」としての記述でしかなくなる。その意味で、内側から書いていくこの論考は、特別なものになったとっていいだろう。小さい町だからこそ、明確に見えてくる構造というものがある。

だが今度は、「この小さな町がいったいどの程度、イタリア的な都市を代弁しているのか」ということが問題になってきた。そこで私は、ひとつの着想を得た。マッサ・マリッティ

マというミクロ・コスモスを見ながら、さらに県や州、国ではいったいどうなのか、というように、ときおり視点をマクロに広げて、マッサ・マリッティマのイタリアの中における位置を確認していくやり方である。そうすることで、イタリア全体、あるいはヨーロッパで起こっている現象が見えてくるだろう。結果として、単純にシエナとマッサ・マリッティマの二軸で比較するよりも、求められている課題によりよく答えられるかたちとなったと思っている。

これから報告書を読み始めていただくにあたって、私のこれまでの研究経緯についても触れておきたい。イタリア留学のための休学中も含めると、法政大学大学院にて4年間、陣内教授の研究室で研鑽を積んだ。研究対象を南イタリアとして、サルデーニャ島およびシチリア島では、陣内研究室のフィールド調査に加わり、その後プーリア州で独自の研究を進めるために、イタリア政府給費金奨学生としてバーリ大学へ'96年から1年間留学している。私が留学中に、陣内研究室の後輩たちがやってきて、レッチェのフィールド調査が実施された。それらに在学中の研究成果は、研究室として複数の出版物として報告しているほか、私個人としては、法政大学大学院の修士論『南イタリア、プーリア地方における居住形態とオープンスペースに関する研究』としてまとめている。

さらに、イタリアでの居住歴としては、北部のミラノやヴェネツィア、中部のアッシジに住んだ経験があることも付け加えておきたい。もちろん学生時代から、興味深い建築や都市空間を求めて各地を旅し、イタリア中の興味深い都市を歩いてきている。今回の報告書では、マッサ・マリッティマでの定住者としての視点だけでなく、そうした経験がすべて有効に働いていることをあらかじめ述べておきたい。

なお、'99年から住んでいるマッサ・マリッティマについて書くのは、今回が初めてではない。『日伊文化研究～特集*イタリア人のライフスタイル』(日伊協会2010年)、『イタリア文化事典』(丸善出版2011年)等へ論考を掲載している。ただこのように多くのページを通じて、総合的にマッサ・マリッティマについて論ずるのは、今回が初めてのことである。